

小林 志郎/作・演出

永田 清嗣/音楽

ミュージカル

日神子

吾はもよ 女にしあれば

ミュージカル・シアター葦の会上演

紀伊国屋ホール

1974年6月21日～24日

シーン

第1幕 有明の海に面したプラザ

インターロードの1

第2幕第1場 日神子館議場

第2幕第2場 日神子齊場神託の場

インターロードの2

第3幕第1場 有明の海に面した松林

第3幕第2場 米蔵

第3幕第3場 送別の宴

インターロードの3

第4幕第1場 カリガの齊場

第4幕第2場 西暦239年の日神子館

登場人物

日神子	矢的国の女王
カリガ	予言する女
アイサ	矢的国の女 1
アイゴ	矢的国の女 2
ヤマメゴ	矢的国の女 3
カサゴ	矢的国の女 4
サヨリゴ	矢的国の女 5
メバルゴ	矢的国の女 6
カガチ	矢的国の女 7
カジカゴ	矢的国の女 8
アコヤゴ	矢的国の女 9
アワビゴ	矢的国の女 10
アユ姫	侍女
ハヤ姫	侍女
ミマキ姫	巫女
マナキ姫	巫女
アズミ姫	巫女
ナカツ姫	巫女
星子	こども
月子	こども
高彦	矢的国の臣、日神子の弟
松彦	矢的国の長老
岩彦	大的国の長老
槍彦	矢的国の臣 岩彦の息子
稲彦	矢的国の臣
狐彦	矢的国の臣

雉彦	矢的国の臣
弓彦	矢的国の臣
鹿彦	矢的国の臣
谷彦	矢的国の臣
苗彦	矢的国の臣
杉彦	矢的国の臣
猪彦	矢的国の臣
熊彦	矢的国の臣
雁彦	矢的国の臣

鮫彦	矢的国の漁師
波彦	矢的国の漁師
汐彦	矢的国の漁師

鷺彦	猪都国の臣、猪都国の鷺王の息子
○丸	猪都国の臣、伝令

その他おおぜい

第1幕 有明の海に面した矢的国のプラザ

場内が暗くなる。オーヴァーチャーが流れてくる。岩をかむ黒潮の音が潮がわりの饒舌さを響かせる。幕が上がると人々の姿がシルエットとなって見える。舞台中央の一段高いところに日神子がいる。今まさに陽の神を迎えんと祈っている。四肢が緊張と弛緩を繰り返しつつ、エクスタシーへと近づいている。彼女から一段下がって、左右の段には巫女が四人日神子の祈りを助けて、巨大なる神なる太陽を大海の彼方から引き上げようとしている。彼女たちは太陽に結ばれた目に見えぬ綱で太陽を引き上げようとしているのだ。

二人の侍女が日神子からやや離れて重要なセレモニーが滞りなく運ばれるよう祈っている。他の人たちは大地に座して夜明けの息を止め、声を殺して、じっと待っている。

しばしあつて空が黒い青色から、徐々に変化を始め、黒い空の一端が破れたかと思うと、次の瞬間から知のような茜色が天空ににじみ始める。日神子が太陽に向かって大きく両手を広げて祈り、叫び、歌う。

M.1 A 「太陽よ！」 日神子ソロ

へアー (14小節のバラード)

M.1 B 「太陽よ！」 日神子と巫女

へアー、ウー、昇られよ

へアー、ウー、出ませよ

作者は敢えてここでドラマの進行を止めて多少の説明を書き加えなければならない矢的国は今から約二千年前に九州の有明の海に面した地にあった。われわれはそこの住人なのだ。背広やスーツを脱いでもらいたい。腕時計をとり、高いヒールの靴を脱ぎ捨ててもらいたい。ついでに石油でできた薄い下着もはぎ取ってしまおう。これでわれわれは生まれたままの姿に帰れたわけだ。裸になったからとて心配はいらない。間もなく衣裳方という人たちが来て毛皮や粗い布地の着物を渡してくれるだろうから、それを被るなり、からだに巻き付けばよい。

私たちにはクーラーもヒーターもない。もちろん車もテレビも、洗濯機もない。着ているものが汚れたら、有明の入江に注ぐ川でゴシゴシからだをこすって汚れを洗い流せばよい。

腹が空いたら干した鹿の肉をかじるか、雑穀を煮て食べれてもらいたい。肉よりも魚を好む人は有明の海へ飛び込んで魚や貝を捕まえてくべよい。デザートがほしい人もいるだろう。矢的国の国境の山に登り、草や木の実を口にほおぼってもらえばよい。食べ物は多分最初は口に合わないであろうが、数日経てばモリモリ食べられるようになる。私たちの肌は絶えず新鮮な空気に触れて小麦色に輝き、瞳は黒く澄み、髪はつやのある美しい緑の黒髪となるだろう。男性は胸幅厚く、鋼のような筋肉が山を駆けたり、大きな石を背負う仕事をやすやすとこなしてくれるだろう。女性は腰が大きく、魅力的な胸は男性たちの目を引きつけて離さないだろう。

私たちは情報が与えられるのを待っていたら、自然の力に押しつぶされてしまう。自分たちの経験と技と感で自然の変化を読み、動物の動きを分析しなければならぬ。星を数え、風のおいや湿り気を感じ、潮の流れと色から漁をうらない、動物の鳴き声から敵の襲撃を予知する。

ところで、毎朝、日神子が東に向かい祈ることによって太陽が昇ってくるのだと彼女も国の民である私たちも信じているのだ。ただ、時間がくれば太陽が顔を出して当たり前という科学を持っていないから、日神子の祈りに手違いがあった場合、その日一日暗闇の中で暮らさなければならないと恐れているのだ。だから日神子の祈りは期待と不安が交錯したドラマティックなセレモニーである。天に向かって今日が無事に始まることを祈りののであるから、あまり朗々と歌ってはならない。ただコーラスは明るく勢いがあり、今日も太陽がずんずんと引き出されてくることを信じて喜びの気持ちを込めて歌うがよい。

歌につれて朝の陽の光が日神子の顔をとらえる。人々の歌に一段と高い喜びが反映される。歌がはじけるようだ。太陽の光は日神子の顔から胸、上半身、そして全身へと広がって行く。太陽が広場へさっと光を投げかける。

太陽を蘇らせた日神子は失神し、崩れ落ちる。二人の巫女が彼女を抱きかかえて連れ去る。

(註) 日神子はシャーマンの巫女である。シャーマンの大きな特徴は、巫女や宗教家者がエクスタシー（脱魂、忘我）の技術を身につけていることである。シャーマンは精霊以上の力、またはそれを左右する力を神的発作によって超自然者との直接接触を通して行使する。その際、シャーマンはエクスタシーに落ちいる。ときとしてシャーマンは人間に不幸をもたらす秘密を知り、種々の儀礼や供犠によって神々や精霊をなごめ、悪霊を調伏して人々に安全と福祉をもたらす役割を担うのである。

太陽が広場へサアッと光を投げかけると

漁 師

(潮がれした声で) フロー！ フロー！

と、仲間に向かって叫ぶ。仲間がそれに答える。
日の出とともに矢的国に活気があふれる。

M2 「米つき唄」 女声コーラス

へ米つきやホイ 麦打ちやホイ
米つき麦打ち ホーイホイ
女山のカラスが鳴いてもホイ
赤ん坊泣いても放っときな
米つきやホイ 麦打ちやホイ
米つき麦打ち ホーイホイ

M3 「ワーク・ソング」 コーラス

女声コーラス

へ米つきやホイ 麦打ちやホイ
米つき麦打ちや ホーイホイ
女山のカラスが鳴いてもホイ
赤ん坊泣いても放っときな
米つきやホイ 麦打ちやホイ
米つき麦打ち ホーイホイ

男性コーラス

海の幸来い
潮に乗ってこい
それ引け やれ引け ホーイホイ

ヨーイソラ エンコラサ ホイアホイ
アホイアソラヨー ソーラコラサ ホイアホイ
アソレ エーンエーン ホイ
コリヤサ エーンエーン ホイ

女性たちが一つの臼に二人ずつ向かい合って米を

つく。漁師の男たちは網を広げ、魚を水揚げし、かごへ放り込む。また猟師の男たちは弓や矢の手入れをする。老若男女が一緒になって舞台いっぱい仕事を展開する。M3が終わると、M4へ続く。

M4 「狩りの唄」 男声コーラス

へーイホーイ エイエイエイ ホーイホーイ オー
狩りに行く ドジ踏むな
天が峰 合点だ
獲物がどっさり待ってるぞ
あぶらがこってりのってるぞ
天が峰の断崖が腕の見せどころ
女房 子どもや 待っている
たらふく 食わせるぞ
ホーイホーイ エイエイエイ ホーイホーイ オー

狩りの兵士たちが天が峰へ出発する。慌ただしかった広場も落ち着きを取り戻す。

アイゴ アイサ、おめえ隣の国の噂を聞いたかえ？

アイサ ああ、なんでも猪都国では獲物がいなくなって飢え死に寸前だっていうんだらう。

アイゴ そうだ。おらの矢的国は日神子さまのご神託があらたかだから食べものの心配などいらねえ。天国みてえさ。

子どもたちが遊びに興じて「子守唄」を歌い始める。子守唄はアイゴとアイサの対話の後ろに流れる。

M5 「子守唄」

へねんねこせ ねんねこせ
ねんねこせ ねんねこせ
お前が大きくなるころは
あたしは鷲の背中にのって
雪の国で暮らしてる
早く大きくなっとくれ
強く大きくなっとくれ

ねんねこせ ねんねこせ
お前が大きくなったとき
わたしは虹の弓にまたがって
光の国で暮らしてる
早く大きくなっとくれ
強く大きくなっとくれ

アイサ 　　でもな、その天国にもいろいろな争いがあるで。

アイゴ 　　松彦様と岩彦様の派閥争いか？

アイサ 　　そうだ。ありゃ、鷲と鷹のけんかみてえだと。

アイゴ 　　松彦様は矢的国連合をかためるには田んぼを広くして稲をたんと作るのが、大事だと考えていなさる。岩彦様はいつ敵が攻めてくるかも知んねえから兵力を増やして、訓練をもっとやるべきだと考えなさる。

アイサ 　　両方とももっともだから、日神子さまもご神託を伺うことが出来なく困っていなさるんだと。ほんとうに。

二人 　　困ったことだ。

このときカリガが上手から出てくる。木で作ったとおぼしき赤子を抱いている。

アイガ 　　もう一人の困り者がきたぞ。

カリガ 　　(二人のそばへきて) 赤いひげの兵士はどこへ行っちまったよ？

この子の父ちゃはどこへいっちまったよ？

アイガ 　　きっと女山へ行っただよ。

アイサ 　　さっきカラスが呼びにきてな。

カリガ 　　女山へ行ったか。カラスが呼びにきたか。

M6 「女山」 カリガ ソロ

～だれ一人 登られぬ山
だれ一人 帰られぬ山
カラス族が住んでいる山
女山 女山
私のなまえはカリガ
カリガは光の色を読む女
カリガこそ矢的国の明日を祈り
田の神 山の神と話しをする女
カラスはそれを知っている
カラス あたしの友よ
カリガ あなたの友
カリガのふるさと 女山 女山

女たち (口々に) 女山と聞くと寒気がする。つるかめつるかめ。縁起でも
ねえ。

と 子どもたちがカリガを囲んではやし立てる。大人たちは見て見ぬ振りをしている。

M7 「カラスのギャー太郎」 子どもたち

～カー、カー、カラスは真っ黒け
真っ黒けのキチガイが
真っ赤かのやや生んだ
真っ赤かの てておやは
赤いひげをはやしてた
赤いひげを生やしてた
カー カラスの勘三郎
ギャー ギャー ギャー太郎
女山のカラスに聞いてみな

だれがてておやか 教えてくれる
女山のカラスが 見ていたから

ヤマメゴ コラ！ もう止しな。馬鹿をかまえばとも馬鹿だよ。
カリガ ギャ太郎ども、去ね！ 馬鹿をかまえばとも馬鹿だよ！
子どもたち とも馬鹿だ！ とも馬鹿だ！ 馬鹿をかまえばお前も馬鹿だ！

と はやし立てる。その子どもたちを追ってカリガ
は下手へ入る。女たちはもとの仕事に戻る。

サヨリゴ 本当に困ったガキどもだ。いつのまにやらあんな唄を作りやがった。
カサゴ 日神子さまもあんなキチガイ占い師を早いとこ追い払ってしまえば
いいんだ。
ヤマメゴ 昔は女王さまでも、今はキチガイ。
カサゴ 巫女のくせに男を知った罰当たりめ。
ヤマメゴ 神の許しはとうてい無理だ。
カサゴ 矢的国をホトのぬるぬるで塗りたぐりやがって！
サヨリゴ もしも大しけがやってきたら、稲が枯れたら、病気が流行ったら、
そりゃ男を抱いたカリガのせえだ！
カサゴ 尊い巫女の坐をみだらな色恋で汚しやがって！
メバルゴ われらが日神子さまにいやさか！
女たち 日神子さまにいやさか、日神子さまにいやさか！

カガチとアコヤゴが糶を持ってくる。臼の中へど
さりとおけて。

カガチとアコヤゴ そーら、仕事だ、仕事だ！

女たちは再び仕事に戻る。
下手でアイゴとアイサが語り始める。

アイゴ あれは三年前だった。カリガのうらないが急に狂いだし、矢的国中
が大騒ぎになった。
アイサ そうこうするうちにカリガのお腹が大きくなりだし、男と寝たのが
だれの目にもはっきりしてしまった。国中に巫女の掟を破ったカリガを非難する
声がわき上がった。カリガは黙って死の山である女山へ入って、自分で自分を処

刑しようとした。(女たちがそばへ寄ってくる) それでな、ある日、自分のからだの中心へ箸を突き刺した。血まみれの赤子を引き出して、三十三日間、赤子を抱いて寝ていたそうだ。カリガはずっと泣き続けていたそうだ。

アイゴ そしてカリガは狂ってしまった。今でも男が帰ってくると信じているそうだ。それにしてもカリガの占いは恐ろしいほどあたって恐ろしいくれえだ。

アイサ だが、カリガの占いはみんな悪いことばかりだ。いいことは何一つ占わねえな。

M8 「そうなんだ」 女たち

へそうなんだ 人が怪我する
病気する しけがくる
日照りが続く
人が死ぬ
鉄砲水だ
火事だ 地震だ かみなりだ
クワバラクワバラ
カリガの占い 凶と出ることばかり
そうなんだ

下手からカガチ、カジカゴ、アゴヤゴが靱を担いで出てくる。

カガチ 昼間の矢的国は女御が島だ。せめて半分でも男を残してくれたら。

サヨリゴ ハッハッハッハ…。男がいねえと、寂しくてなんねえ。

カガチ 冗談いいうんじゃね。いいか、今ここで大地震でもあってみろ、敵がせめてきてみろ、この国はひとたまりもねえ！

カサゴ 地震は日神子さまがしずめてくださらあな。戦のこたあ岩彦さまの仕事だ。

サヨリゴ そしてヤヤを作るのが俺たち女の仕事だな。(女性たち健康的に笑う)

カガチ みんな、もっと大きく目を開けろ。日神子さまのお力で戦は終わったものの、いぜん奴国(なこく、なのくに)はわが国の命令に従おうとしない。

カジカゴ　　しかも狩りを国の仕事の中心にすえ、それを口実に新しい弓や槍を作って戦組を強力にし、矢的国連合の際に攻め込もうと虎視眈々とねらっているのだ。

メバルゴ　　奴国が攻めてきたらこっちも攻めればいいたるうに。

カガチ　　そこだよ。だから矢的国の戦組の兵力を今の二倍にしなければ五分に戦えないのだ。

アコヤゴ　　奴国が反乱を起こさないのは矢的国連合と武力がまだ五分五分と計算しているからだ。武力のバランスがとれている限り戦は起こらない。しかしいつなんどき、奴国は勝手に神からお言葉を授かったといってせめてくるかわからねえだ。

ヤマメゴ　　その考えは日神子さまのお力を軽くみるものだ。神のお言葉を語れるのは日神子さまだけじゃ。

カサゴ　　奴国には神のお言葉を聞ける人がおらんしな。だから神のお言葉だといって侵略を始めるのは無理だと思うが。

サヨリゴ　　そうよ。現に戦争がないのに奴国が攻めてくるはずだと決めつけて戦争の準備をするのはどうかね。

カサゴ　　だから日神子さまだって岩彦將軍の軍隊拡大をなかなかお認めなさねえのさ。

メバルゴ　　もちろんさ。戦組の力より、あたしは日神子さまの力を信用するね。

カガチ　　岩彦將軍のお考えはな…

サヨリゴ　　日神子さまのお考えはな…

ヤマメゴ　　日神子さま、いやさか！　殺し合いはごめんだ。

カジカゴ　　日神子さま、いやさか！　戦組の力で平和を。

カサゴ　　日神子さま、いやさか！　戦のない平和を。

女たち　　日神子さま、いやさか！　日神子さま、いやさか！

と、女性たちは「日神子さま、いやさか」を繰り返す。フリーズになる。アイサとアイガは前と同じように単調な仕事をせつせとやりながら対話する。

アイガ　　日神子さまにいやさか。そう思っちは国中がいつも議論をしている。こんなに国づくりをみんなが真剣に考えたことはなかった。

アイサ　　しかし一つ間違えると、国が真二つにわれてしまうぞ！

アイガ　　日神子さまが純血であらせられ、神々とお話ができる限り、矢的国連合は安泰じゃ。

アイサ　　日神子さまに、いやさか！　日神子さまに、いやさか！

このとき、上手から今朝ほど狩りに出かけた兵士の一人、狐彦が飛び込んでくる。

狐彦　　ウワー、ワワワッ。大変だ！ やられた。どうしよう。戦だ、戦だ！
アイガとアイサ　どうした？ 何が起こっただ？
狐彦　　み、水をくれ！
アイサ　　これ、狐彦、落ち着け！ だれか水をくんできておくれ！
アイガ　　おーい、みんなきておくれ！
カガチ　　狐彦、しっかりしろ。どうしたんだ？ 何が起こったんだ？
アイガ　　水だ、それ飲みなされ。

狐彦は水を飲む。女たちは彼の周りに集まっている。彼の怪我の手当をする。

カサゴ　　さあ、話しておくれ。何は起きたんだ？
狐彦　　捕まってしまった、みんな、捕まってしまった！
サヨリゴ　　なんだと、みんなが捕まっただと？
狐彦　　そう、みんなが。
サヨリゴ　　つまりどういうことなんだ？ 鷹彦さまも捕まってしまったと言うのか？
狐彦　　その通りだ。

全員が驚き、不安に落ちいる。みんながカガチの顔を見る。

カガチ　　だれに、どこで捕まったのだ？
狐彦　　あっちで、あいつらに捕まった！
カガチ　　それが大人の返事か！ 天が峰だろう。だれに捕まったのだ？
狐彦　　それがだれだかよくわからねえのだ。
カガチ　　そんな馬鹿な！
狐彦　　馬鹿なといったって、ほんとにだれだかわからんのだ。
カガチ　　じゃ、どうやって捕まえられたのだ？
アイガ　　あ、松彦さまだ。

急を聞いた松彦と部下が登場する。

松彦 おい、狐彦。何があったのだ？
狐彦 （泣きながら）すみません。みんな捕まってしまったのです。
松彦 なに？
カガチ 鷹彦さま以下全員、天が峰で捕まったらしいのですが、相手は何者
 だか不明のようです。
松彦 鷹彦さま以下全員だと！ しかも相手が分からない？
カガチ はい。
松彦 天が峰は猪都国との国境。かの国がわが国の戦組、それも鷹彦さま
 一行と知っていて捕らえるはずがない。わからん、わからん！

松彦は腕を組み、天を仰ぐ。人々は身内のことが心配になり浮足たってくる。みんなの心にこれが戦争につながるのではないかという不安がかすめる。

M9 「ヒソヒソ」 コーラス

へヒソ ヒソ ヒソヒソヒソヒソ
 フームフーム
 ガヤガヤガヤ シーツ ヒソヒソ

M10 「ガヤガヤ」 コーラス

へだが兵士が死んだ
 これはいったいどうすればいいんだ
 そうだ そうだ そうだ
 どうすればいいんだ

へだが何にもするな
 これはいったいどうしてこうなるんだ
 そうだ そうだ そうだ
 どうすればいいんだ

へでも心配なのだ
敵はいったいどこの奴なんだ
そうだ そうだ そうだ
どうすればいいんだ

へだが天が峰で
うちの亭主はどうなったんだ
そうだ そうだ そうだ
どうすればいいんだ

へガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ
ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ
心配だ 心配だ
心配だ 心配だ

松彦 静まれ、しずまれ。（群衆の騒ぎはひとまずおさまる。槍彦と部下
たちに）ただちに日神子さまの御前で寄り合いを行う。槍彦！

槍彦 はっ。

松彦 そちは、父上岩彦將軍を御呼びして参れ。

槍彦 はっ。岩彦將軍を御呼びして参ります。

松彦 みなのものはここにとどまって、連絡を待ってくれ。いたずらに心
配するのではない。噂に惑わされてはならない。よろしいか！

人々 わかりました。

松彦 狐彦、参れ。

槍彦は下手へ駆けて入る。松彦は狐彦をつれて上手
へ消える。再び人々の心配が高まってくる。

M11 「ヒソヒソ」 コーラス

へヒソ ヒソ ヒソヒソヒソヒソ
フーム フーム

ガヤガヤガヤ シーッ ヒソ

M12 「そがやがや」 コーラス

へだが兵士が死んだ
これは一体どうするんだよ
そーだ そーだ そーだ
どうすればいいんだ

へだが何にもするな
これは一体どんなわけなんだ
そーだ そーだ そーだ
どうすればいいんだ

へでも心配なんだ
敵は一体どこのやつなんだ
そーだ そーだ そーだ
どうすればいいんだ

へだが天が峰で
家の亭主はどうなったんだい
そーだ そーだ そーだ
どうすればいいんだ

へガヤガヤ ガヤガヤ
ガヤガヤ ガヤガヤ
心配だ 不安だ
心配だ おそろしい

松彦、岩彦たちが戻ってくる。

M.11 とM12で約30分の事件の経過を表現する。

M13 「静まれ！」 松彦ソロ

へだまれ 静まれ
悲しいことだがな
困ったことだがな
だが 何にもわからぬうちに
さわぐでない さわぐでない

松彦 矢的国は他の十数カ国の要である。わが国が戦に踏み切れば他国をも戦火に巻き込むことになる。無益な争いを引き起こして、国土を赤い血潮でそめてはならぬ。

岩彦 しかし不慮の事態に備えて戦の準備だけはしておこう。（進み出て）日神子さまのために！

兵士たち 日神子さまのために！

兵士の一人が大きくホラ貝を吹き鳴らす。貝の音が山を越えて伝わって行く。

岩彦 見張りにつけ！ 兵糧の用意！ 弓矢三百張り用意！

兵士たちが岩彦の命令を復唱して伝える。

M14 「戦闘の用意」 ダンスナンバー

岩彦の手が、指がキビキビと動く。彼の手や指の動きにつれて兵士たちや女たちが左右前後に動き、かけ声や足音が統制された国の活力を感じさせる。物資を運んできては、集積したり、分配して運びさるグループもいる。貝の音が移動する。アイガとアイサは兵士の顔に神の加護を願って印を文身のようにかき込む。

カリガが出てくる。みんなに話しかける。

カリガ みんな聞いてくれ！ おれは巫女の掟を破って男を知った。この白い肌の下には、熱い真っ赤な血が流れているからだ。その血があたしを駆り立てたのさ。きけ、さあ、きけ！ 日神子の血だって狂うぞ！

一瞬、みんなの手が止まる。岩彦と松彦が大声で怒鳴る。「仕事を続けろ！ 手を休めるな！」。二人はカリガを追い払う。

カリガ （木に登って）あたしより白い肌、大きな胸、大きな尻、あたしより危ねえんだ。きつときつと、間違いを犯すよ。あたしを狂わせた男が今度は日神子を狂わせるよ！ 女山のカラスがそう言っているぞ！ カラスがそう言っているぞ！

みんなは木の上のカリガを見上げる。彼女の忠告に耳を傾けようとしなかった兵士たちも集まってくる。カリガは悲劇の予見を叫び続ける。
舞台が暗くなる。

インターロードの1

アイサとアイゴに照明があたる。二人はいつもの
場所で仕事をしている。

M15 「アイゴとアイサの対話」 アイゴとアイサ

～ (アイゴ) 準備が終わってまた会議

(アイサ) 半日たっても終わらない

(アイゴ) 友好的な猪都国が日神子さまの弟の

(アイサ) 鷹彦さまを捕らえたとは

(二人) 何ともかんと不思議だね

～ (アイゴ) 私が聞いたうわさでは

(アイサ) 鷹彦さまとひきかえに

(アイゴ) 若い娘を三十人 食べ物飲み物一月分

(アイサ) 持ってこいとか 寄越せとか

(二人) 無茶なことを言ってるのだそうだ

～ (アイゴ) 日神子さまの御前で

(アイサ) 松彦岩彦お二人の

(アイゴ) 考え意見が右左 合うも合わぬもはや一夜

(アイサ) 岩彦さまの意見が勝てば

(二人) 明日を待たず 戦の開始

～ (アイゴ) 松彦さまのご意見は

(アイサ) 両国使者を出しあって

(アイゴ) 落ち合うところは天が峰 双方ゆっくり話し合い

(アイサ) 平和にすむよう努力をすべし

(二人) そう言っていなさるそうだ

二人にあたっている照明が消えて、カリガに照明が
あたる。

M16 「赤いひげの兵士」 カリガ・ソロ

へあるとき 夫がさって
あるとき 赤子がさって
月がさり 星がさり
風がさり 夜が消えたとき
きっと どこからか
赤いひげの兵士が
私のもとへ 帰ってくるだろう

カリガの照明が消える。再びアイゴとアリサの二人に照明があたる。

アイゴ なあ、おめえ。捕らえられた思った鷹彦さまが夕べひょっこり二日ぶりに帰って見えたよ。

アイサ なんでも猪都の国では他の国に知られては困る頼みごとがあったんで、あんな無茶なやりかたで鷹彦さまを連れていったんだと。

アイゴ その知られては困る頼みごととは一体何じゃろう？

アイサ 猪都の国は飢え死に寸前とやら。そこでぜひぜひ矢的国で狩りをさせてくれといってるそうさ。その代わり猪都の国の王子さまの鷹彦さまを人質によこすんだそうさよ。

アイゴ すごくいい男だというじゃないか。一目あいたいもんじゃ。

アイサ 鷹彦さまは、猪都の国を救ってやれという。長老の岩彦さまは敵にだまされるなと反対する。会議は喧々諤々だそうさ。

アイゴ そうとも。大変なけんけん、がくがくだそうさ。

二人の照明が消える。「インターロード1」が終了する。

第2幕第1場 「日神子館の議場」

M17 「ケチャ1・そもそもこれしかない」

～そもそもこれしかない
敵の大軍 ダメだダメだ
それでもいいのか
これが一番 これこれが
拙者の考え これだけは
喧々 諤々

～救うのはこれしかない
敵ではないぞ ダメだダメだ
それでもいいのか
これが一番 しかじかが
拙者の考え これだけは
喧々 諤々

～戦いは早いがよい
敵の大軍 ダメだダメだ
それでもいいのか
これが一番 これこれが
拙者の考え これだけは
喧々 諤々

～猪都の人は 飢えている
敵というな ダメだダメだ
それでもいいのか
これが一番 しかじかが
拙者の考え これだけは
喧々 諤々

「ケチャの1」は、暗転の中からブレイク・インする。矢的国の最高の意思決定の会議は行われる議場

である。中央に日神子が座っている。その背後に巫女が四人、そして彼女の上下手に侍女が二人位置している。日神子の下手側に穏健派の鷹彦と松彦、そして二人の考えに同調する重臣たちが座っている。彼女の上手側には、急進派の岩彦とその息子の槍彦、そして二人を崇める重臣たちが座っている。会議は膠着状態に陥っている。

松彦 待て、待て！ 双方とも待たれい！ まだ鷹彦さまの話しの途中ではないか。

鷹彦 俺はこの目で見てきたのだ。猪都の国の人々がどんなに飢えているか、米も粟も芋も、みんな食べ尽くしてしまっている。どうか信じてくれ！

岩彦 信用しとる。問題はそんなことではない。確かに彼の国は食料不足に陥っているかもしれないが――

鷹彦 なら、わが国で狩りをさせてやってもいいではないか。やまで山菜を取らせてやってもいいではないか！

岩彦 待て、待て。苦しんでいるかもしれないが、敵をわが国の領土内に、しかも武器を持っている兵士も一緒に入れさせることは大変危険なことだ。侵略の意思なしという保証がどこにある！

急進派の臣 しかり！ 保証がどこにある。

鷹彦 うるさい、黙れ！ だから猪都の国は鷹彦を人質に出すと提案しているのじゃ！

岩彦 そもそも日神子さまの館内でスパイ活動をするために鷹彦殿が送り込まれてくるのかもしれない。

鷹彦 そんな馬鹿な！

槍彦 父上は用心に用心を重ねるべきだと申しておられるのじゃ。甘言に惑わされて国を取られた教は教えきれない！

M18 「ケチャ2・そもそもこれしかない」

へけんけん がくがく これだけは
けんけん がくがく ならぬ
何と言っても けんけん がくがく
それでは拙者の受け売りだ

これこそ何と名案だ
ウム かしながら ウムウム
待った、待った おそれながら

鷹彦 あなたがもし猪都の国の鷲彦殿の立場だったらどうする？
岩彦 もちろん、助けを求める。
鷹彦 じゃ、助けてやってくれ。
岩彦 助けてもらうことと、助けてやることは大違いだ。
穩健派の臣 それは卑怯だ。言い逃れだ。
岩彦 助けてもらうためには信用してもらわなければならん。助けてやるためには信用しなければならん。
鷹彦 じゃ、信用してやれ。
岩彦 できん！
鷹彦 なに！
岩彦 今までの建国の歴史がそう教えている。他国を信じて滅ぼされた国がいくつあると思う？
国粹主義派の臣 そうだ。泣き顔に同情してはならぬ。だまされるな！
穩健派の臣 ガリガリの石頭！ 血も涙もないのか。友好関係を保持せよ！

M19 「ケチャ3・そもそもこれしかない」

～かかかき かかき かかかかかき
かかき かか
だから か だから か
だから だ
だめだ だでいだだだ だめだだでい
だだだ
かかか かかかきかか
なか なか なかなか ちきちきち

「ケチャの3」が終わると、もう両派の意見は出し
吊るされた感がある。整然と自分の場所に座って長老

松彦の裁定を待つ。松彦は大きく手で両派の気持ちを押し沈めて、おもむろに立ち上がる。

松彦 岩彦殿も鷹彦さまも互いのお考えを言い尽くされたことと思う。日神子さまのご神託を仰ぐ前につけ加えることがあったら申されるがよい。ただなるべく手短にやってほしい。最初に岩彦殿から。

岩彦 (おもむろに立ち上がる) 猪都の国はすばらしい隣人である。しかし他所の国なのだ。他国である限り友好的で共存しているのは仮の姿にすぎない。いつ牙をむくかわからないのだ。一方がもう一方を支配するか、逆に支配されるか、この宿命的な事実しか国家間にはないのだ。

いかなる卑劣な戦略をとろうと、支配してしまえば正当化できるのだ。猪都の国の今回の食料援助の要請は鷹彦殿が言われる通り事実かもしれない。しかしそれがかの国の戦略でないという確証はどこにもないのだ。現に矢的国のわれわれが二つの考に分かれて対立し、歩調が乱れているが、これこそ敵の望む第一歩なのかもしれない。日神子さまのために国を守護し、命を捨てるのがわしの務めで生き甲斐なのだ。(悪い脚を引きずって一步日神子の坐に近づき) 日神子さま、猪都の国の謀略にのせられてはなりません。

岩彦は杖をつきながら、自分の坐に戻る。代わって鷹彦が一同の前に進みでる。

鷹彦 私は言うことは言い尽くしました。皆さんに求めるものは猪都の国への同情でなく、飢餓に陥っている猪都の国の現状を理解して下さることなのです。毎朝、天が峰を仰ぎ見るとき、あの秀麗な峰を頂く矢的国は幸せだ。美しい峰の上を飛ぶ鳥も、麓の森の中を駆ける動物もきっと私たちと同じように幸せを感じているに違いない。この人間と自然の調和が作り出す本来の平和の意味を大事にしたい。そしてこの幸せと喜びを、今苦しんでいる猪都の国の人々に、少しだけ分けてあげようではありませんか、というのが私の考であり、お願いであります。

鷹彦が自分の坐に戻る。全員まったくの沈黙。松彦が日神子の方へ一步膝を進める。

松彦 日神子さま。ご覧の通りでございます。ご決済のほどをお願い申し上げます。

日神子 長い間の会議、ご苦労でございました。われはこれより禊にはいります。明朝、ご神託の儀をとりおこないます。ではみなさん、お支度をお願いします。

松彦 ははあ。日神子さまのために！

一同 日神子さまのために！

M20 「いやさかA」

ブリッジの音楽「日神子さま、いやさか」にて出演者が舞台転換を行い、斎場（うたぎ）が作られる。日神子の身支度が行われ、祭具が並べられる。

すべての準備が完成すると、日神子、四人の巫女、二人の侍女を残して全員が退場する。

第二幕第二場 日神子齋場神託の儀

舞台中央の奥に祠があり、その前に新しい緋の布が敷かれている。無数の鏡が飾られている。全体の色のトーンは黒であるが、あちこちに鮮やかな原色が点在している。それらは原石、動物の骨・羽・角、木の根などから作られた装身具や神事に使われる祭具である。

M21A 「感応の歌」日神子ソロ

ウウウウウウウ (8小節)

ウウウウウウウ (8小節)

ハジヤ ハジヤ ハジヤ ドドア ワア

ハジヤ ハジヤ ハジヤ ドドア ワア

ワア ハオ エ ワア ハオ エ

ワア ハオ エ オー ハ オ カ ヤア

(これを4回繰り返す)

M21B 「感応の歌」巫女コーラス

ドギギンナ ドギギンナ ドギギンナ カ

ドギギンナ ドギギンナ ドギギンナ ゴン

(これを4回繰り返す)

ドギギンナ カ ドギギンナ ゴン

ドギギンナ カ ドギギンナ ゴン

ウウウウウウ

日神子の歌と踊りは彼女が神と感応し、そのお告げを授かるためのセレモニーである。最初に記したように日神子は巫女としてエクスタシー（脱魂、忘我）の技術を会得している。このエクスタシーに陥ったお状態の中で彼女はお告げを語るのだ。四人の巫女は日神子が神と感応するのを助けるためにともに歌い、踊るのである。日神子と巫女たちの踊りは雅やかなものではない。生白い、ほっそりした、なよなよ型の女性が踊る踊りではない。異性に挑むように憚ることなく盛り上がった乳房、濃くて粗い長い頭髪、どんなに踊っても疲れることを知らない堅太りの肉体の持ち主こそふさわしい祈りの踊りである。生命力や肉体に命を吹き込む力を宿した肉体を持って表現する明るく、健康的で、それでいて好色で、卑猥な踊りである。それはとりもなおさず、神のお告げを授かるために矢的国が神に捧げるエンターテイメントであるのだ。

M21Bの日神子の歌は、高音ではたと止む。狂ったようにカッと目を見開き、一点を凝視する。彼女の肉体から絶叫に似た言葉が矢継ぎ早に飛び出してくる。

日神子　　猪都の国を救え！　食を与えよ！　さすれば矢的国は安泰じゃ。
だが、日神子の、日神子の-----

と叫んで再び失神する。巫女たちは裸身に近い日神子を白布に包み、祠のうちへ運ぼうとするとき、下手からカリガが登場する。カラスの群れがカリガの侍女のように付き添っている。カラスの鳴き声が激しい。

カリガ　　ハッヒ、ハッ、ハヒヒヒヒ-----。（日神子の神託を真似て）「猪都の国を救わば矢的国は安泰じゃ。だが、日神子の——」。よいか、みなのもの、この続きをよーく聞け。猪都の国を救わば、日神子の身の上に恐ろしい報復が降り掛かる。日神子の血が狂いうぞ！

カリガの言葉に矢的国の人々は騒然となる。巫女たちは日神子を守護し、カリガの言葉を振り払おうと祈る。兵士たちがカリガを取り押さえようとする。彼女はカラスたちに守られながら、巧みに逃げ回る。カラスが激しく鳴いて、兵士たちを襲う。

カリガ　　赤いひげの兵士が帰ってくる。赤い血で祝おうぞ。血よ、ほとぼしれ。カラスたちよ、舞え！ 狂え、狂え！ 赤い血潮の舞を舞え！ カリガのカラスたちよ、目の力を奪い取れ。闇を運んでこい！

M22 「カラスの立ち回り」 ダンス・ナンバー

カラスたちが明かりに群がり、かがり火を蹴散らす。あたりが暗くなる。人々の恐怖におののく叫び声があちこちに起こる。カリガの「日神子に悪霊がつきまとうぞ。」「赤いひげの兵士が帰ってくるぞ！」という声が響き渡る。カラスと兵士の戦いが続く。

すこしして静寂になる。人々は地に倒れ臥している。カリガとカラスの姿は見えない。

日神子　　（脱魂したまま。人形のように神託を繰り返す）猪都の国を救え。食を与えよ。さすれば矢的国は安泰じゃ。だが、日神子の――。

日神子を残して照明が溶暗する。そして幕が下りる。

第3幕第1場 「有明の海に面した松林」

夜、九時過ぎである。満月が中空に輝いている。松風の音が聞こえる。上手、立ち木の陰に日神子が何かを待ってたたずんでいる。下手から鷺彦が登場する。

M23 「黒髪の乙女」 鷺彦ソロ

へ夢にまで見た日神子
優しい人
黒い髪が息づく
あの黒髪を わが胸に
抱きしめるのは
いつ いつの日か
そそと泣くのを見たい

M23 「さぎひこ」 日神子ソロ

へわたしの過去にはいなかった
山のおいのする男
さぎひこさま さぎひこさま
あなたは なぜ目をそらすの
わたしが見ると
わたしが嫌いなら 教えて
教えて 本当のお気持ちを

鷺彦 (日神子に気づき) あ、姫！

日神子 (怒ったように、厳しい態度で鷺彦を凝視する。無言。)

鷺彦 姫、姫はいつからここえ？

日神子 (冷酷に) ご存知のはず。

鷺彦 (どぎまぎして) ええ、いいえ——し、知りませんでした。(急いで話をそらす) 私は猪都の国のことを考えていました。わが国は山また山であり狩猟の技術にすぐれ、獲物が多く、他の国のあこがれの的であった。しかし、あるときから突然動物が一匹もいなくなった。神がわれわれを試そうとなさっているのであろうか、神が国造りをやり直そうとなさっているのであろうか。山育ちで、他の国と交流したことのない鷺彦にはすべてが謎です。日神子さま、いかがお考えですか。

日神子 獲物が捕れなくなったことは、同情いたしますわ。動物は、天候の不順が続けば、山また山、谷また谷を越えて食べもののあるところへ移動しますわ。もう直ぎ、獲物たちは戻ってきますわ。日神子には動物たちがもとの山へ帰りたがっている気持ちが伝わってきます。

鷺彦 本当ですか。わたくしは、動物たちがしばらく戻ってきてほしくありません。猪都の国で狩りができるようになれば、あなた様とお別れしなければなりません。

日神子 (つぶやく) 吾はもよ女にしあれば、汝(な)を除きて(おきて)男(お)はなし、汝を除きて夫(つま)はなし

鷺彦 姫！

日神子 (再びつぶやくように。しかし今回は確信を持って) 吾はもよ女にしあれば、汝(な)を除きて(おきて)-----。

M23 「吾はもよ 女にしあれば」 日神子ソロ

へ吾はもよ
女にしあれば
汝をおきて
男はなし

汝を除きて
夫はなし

鷺彦　　姫。（思わず一歩日神子の方へ近づくが、思いとどまる）国の大事を、人質の身であることを忘れてしまうところでした。愚かな鷺彦をお許ください。

日神子　　（激情に流される）鷺彦、日神子が心を裸にしても、そなたは愛の言葉で姫の心を覆ってはくださらないのですか？ 日神子の心は心は裸のまま曝されているのですか？

鷺彦　　ま、待ってください。鷹彦さまを始めとして、矢的国の人々がわが国のために力を貸してくださっている時に、この鷺彦がどうしてよその国の姫の心を盗むことができますようぞ！ それにわたしはある人と約束をしました。もし誓いを破ったら殺されていいという約束をしたのです。

日神子　　（大きく驚く）そんな人がいらっしゃったのですか。馬鹿でした。日神子は馬鹿でした。（泣き崩れる）

鷺彦　　違う、違う！ 姫は考え違いをなさっている。人質としてわたくしがこの館へ来た日、岩彦殿と約束したのです。決して日神子さまと親しくしないと。もし鷺彦が日神子さまと愛を交わすようなことになったなら、この命を岩彦殿の手にゆだねると約束したのです。

日神子　　（一語、一語、切り込むように）そうでしたの。あなたは食べものが欲しいあまり、自分の心まで他人の手に渡す約束をしたのですか？

鷺彦　　姫！

日神子　　わたくしは今まで、姫は男の人と結ばれてはならない、女王として命もからだも矢的国の為に捧げなければならないと考えていました。しかしあなたを見て、この考を捨て去りました。あなたは勇気のある方と聞いていました。あなたには日神子の心を、一人の女性としての心を目覚めさせてくれる何かがあります。あなたにお会いしてから、ずっと日神子の心は揺れ動いていました。そして日神子は自分の心に素直になろうと決意しました。女王の地位も命も賭けました。自分の気持ちに素直に生きることに地位も命もかけました。

鷺彦　　姫、鷺彦も死ぬことを恐れませぬ。ただ、そのために姫が箸をからに突き刺し、腰から下を血で真っ赤に染めなければならないとしたら、また、姫が生きながらえたとしても愛の炎に身を焼くあまり、逆巻く川に身を投じて蛇に化身するようなことになったら----。

日神子　　鷺彦さま、わたしは女です。わたしはもとより女です。

鷺彦 日神子さま。
日神子 鷺彦さま。

M26 「愛に生きたい」 日神子と鷺彦

^(鷺)

たとえ この身に
天が峰が被いかぶさり

(日)

有明の 海の深みに
おちこんでも

(鷺)

この愛に

(日)

この愛に

(鷺・日)

生きたい

^(日)

恋することはすばらしいわ

(鷺)

月の光りさえ いつもと違う

(日)

本当に すばらしい

(鷺)

まるで 夢のようだ

(日)

生きていて よかったわ

初めての このうれしさを早く

^(鷺)

この髪のおい

この喜びを 早く確かめたい

(鷺)
わたしのものだ
愛することは すばらしい

(日)
頬をなでる風まで やさしい
本当にすばらしい

(鷺)
まるで夢のようだ

^(日)
あなたに会えて よかったわ

(鷺)
日神子

(日)
夢のような この幸せが
いつまでも

(鷺・日)
続くように

二人は抱き合い、口づけをする。
侍女が暗がりからそっと現れる。

侍女 (小さな声で) 姫、姫。

日神子と鷺彦はさっと離れる。侍女は、正面を向いたまま、日神子と鷺彦を見ようとしなない。

侍女 あの、鷹彦殿が姫を探しておられます。

日神子 (不安になる) この時間に、わたしを探して？

侍女 はい。明日、猪都の国へお米を運び込みたいと申されています。

鷺彦 米を、私たちに！

侍女 はい。それにはぜひとも今夜中に姫のご裁断を仰がなければと、はい、そう申されています。

日神子 すばらしいことだわ。でも明日の朝でもこと足りる話しです。無理に今でなくても？

侍女 皆様もそう申し上げたのですが、鷹彦さまは姫のご裁断を仰いだら今夜のうちに準備にかかりたいと仰せられています。なにしろ言い出されたら、後へお引きになられないのでみなも困っておられます。姫が直に鷹彦さまにお話しにならないと、ことはますます大きくなりそうです。すでに姫をお探しする兵士が松明をかざしてあちこちに散りました。

上手の方で、口々に「ひめ!」、「ひめー!」と探す声が聞こえる。松明のあかりが揺らめく。

日神子 どうでしょうか? 鷹彦さまと一緒にの場所を見つかったら、どうしましょう。ねえ、お前、どうしよう、どうしたらいいの?

侍女 姫はおいくつになられても、こういうことにはまるで子どもですね。まあ、わたくしにお任せください。

上手の呼ぶ声がさらに近づいてくる。

侍女 皆のもの、今来てはなりませぬぞ! 姫は水浴中です。お清めが終わればわらわが姫をお館へおつれします。そちたちはお館へ帰り、姫が戻られるのを待つのですぞ。

兵士たち ハ、ハア。

侍女 忘れずに、その旨岩彦殿にお伝えください!

兵士たち ハ、ハア! (兵士たちは上手へ退場する)

侍女 姫、急いでお支度を!

日神子 鷹彦さま、あの月が明日再びあの松の梢を染めるころ、ここでお待ちしています。たとえ松風が鳴り止み、有明の海の汐が凧いでも、姫の心の高鳴りは静まることを知らないでしょう。どうか信じてください。

鷹彦 鷹彦の唇が覚えた姫の香しい香りと吐息の暖かさを永久に忘れることはないでしょう。この胸の喘ぎは決して作り物でないことを信じてください!

侍女 姫、急いでお戻りを! 話しの続きはまた次の機会になさい! 姫!

M27 「吾はもよ 女にしあればB」 日神子・鷹彦

^(日)

吾はもよ 女にしあれば

(鷺)

日神子 日神子

(日)

汝をおきて 男はなし

(鷺)

汝をおきて

(日)

男はなし

(鷺)

日神子

(日)

汝をおきて 夫はなし

(鷺)

日神子

(日)

汝をおきて 夫はなし

再び二人はひしと抱き合う。侍女がやきもきする。やっと二人は体を離す。照明暗くなる。カラスの声と羽音が聞こえる。

第3幕第2場 「米蔵」

M28 「米倉をひらけ！ A」 ダンス・ナンバー

M28で照明が明るくなる。東雲の時間である。山はまだ黒く、地平線の海が茜色に染まりつつある。

舞台中央に、鷹彦、松彦、汐彦が立ち、荷物を運ぶ指揮をとっている。

鷹彦 (下手へ向かって) 大切な塩だ！ 心して運べよ！

この号令に答えて、下手の袖から塩を運ぶ兵士らの「日神子さまのために」というかけ声がかえってくる。鷹彦は舞台に いる人々に向かって語る。

鷹彦 それでは残りのものは、次の仕事だ。稲彦、倉庫の扉を開けろ！

稲彦 何だと！ 鷹彦殿、この扉の中のものが何であるかお分かりですか？

鷹彦 分かっている。大切な米だ！

稲彦 そうでしょう。命の次に大切な米です。鷹彦殿は矢的国連合を維持するために血と汗をひきかえに生産した米です。人に分けてあげるために生産した米ではありません。いつか飢饉が来た時のために、矢的国の老いも若きも木の根を抜き、岩を取り払い、土をおこし、水を引き、苗をうえ、みんなで大事に育てた実らせたもの。この米は祖先の知恵、私たちが矢的国連合を束ねる糧なんです。。矢的国にこの米があり限り、他国の力の前に屈することもない。このいなひこは矢的国の米蔵の番人です。たとへ日神子さま兄上のお言葉であっても扉を開けるわけにはゆきません。稲彦はここを動きません！

鷹彦 お前の言うことはわかる。長老さまを始め、みんなが反対しているのを知っている。しかし隣国の猪都の国の人々が飢えと病気でばたばたと倒れている。しかも幼い子どもたちが母親の背中や腕の中で鳴き声をたてる力もなくして息を引き取っているそうだ。こんな不幸を見て見ぬふりができないではない

か。姉上にもあらかじめ話してある。

稲彦 日神子さまは許可をお出しになったか。米蔵を開けてもよいとおっしゃわれたか？

鷹彦 いや、姉は岩彦殿やそちの同意が得られたら、開けてもよいと――。

稲彦 そうだろう。このような非常事態下では、長老方のご同意をもらわなければ、米蔵の扉を開けるわけには参りません。わたしの考は間違っていますか、松彦殿？

松彦 いや、稲彦殿の考は正論じゃ。鷹彦殿、無謀なことをなさったら、姫がお困りになられますぞ。

鷹彦 俺が全責任を負う。だれにも迷惑をかけん！

稲彦 岩彦殿がおっしゃるように、猪都の国の本心は別にあると信じて疑わぬ長老方が多い。しかも鷹彦殿、岩彦殿はいま北方の見回りに出られて留守の時に、米倉を開けては鷹彦殿の謀略ととられても仕方がなかろう。

鷹彦 (気が高ぶっている) いいから、いいから。任せておけ！

松彦 鷹彦殿、カリガの予言を知っての上でかな？

鷹彦 もちろんだ。なあ、爺や、ここは目をつぶってくれ。俺の気持ちを分かってくれ。頑固な連中と相談をしていたら、猪都の国の死人が増えるだけだ。自分が正しいと信じることを行うのに、どうして逡巡してられるか。この気持ちをどうか分かかってほしいのだ。(今度は稲彦の手を取って) 稲彦よ、俺は命をかけているのだ。俺に米百俵だけ盗ませてくれ。今から運び出して、百俵になったところで俺をふん縛ってくれ。俺は米百俵の盗人としてどんな罪にも喜んで服す覚悟だ。鷹彦は隣国の人たちが飢えて死んで行くのを知りながら、黙って見過ごすことはできない。おれの首をさしだせば、数百人の人の命が救われるのだ。さあ、稲彦、お前の命令がないと米倉が開かないではないか！

稲彦 (鷹彦という熱血漢の思いに負けて) 鷹彦とこの稲彦が死ねば、猪都の国の数百人の人の命が救われるというんだな！ よし。百俵といわず、二百俵を盗め！ (部下たちに) 米倉を開けよ。米を運び出せ！

人々 おう！

鷹彦 ありがとう、稲彦！

稲彦 こら、盗人、女々しいぞ。鼻をかめ！ 日神子さまのために！

鷹彦 日神子さまのために！

M28 「米倉をひらけ！ B」 コーラス

へ蔵の戸を ひらけ
運びだせ エイ
米を 米を 米をはこぶ
有明の 宝を
肩から 肩へと しっかりのせて
木の根や石に 気をつけろ ソーラ
いそげ ヤッコラサ
いそげ ドジふむな
エンヤホーイ エンヤホーイ
エンヤソーレ ホイソラホイ
ソーレ どっこいしょ

へ米を米を はこべ
山を越え エイ
山を 谷を 恐れるな
有明の 宝を
一足 ひとあし しっかりふんで
枝やつるにも 気をつけろ ソーラ
いそげ ヤッコラサ
いそげ ドジふむな
エンヤホーイ エンヤホーイ
エンヤソーレ ホイソラホイ
ソーレ どっこいしょ

全員が米を運ぶ。鷹彦と稲彦が一番張り切っている。米倉から下手の山に向かって、米を担いだ行列が進んで行く。カラスの鳴き声が聞こえる。

照明が暗くなる。

第3幕第3場 「送別の宴」

M29 「送別の宴のテーマ」

M29の音楽が入ると、舞台が明るくなる。猪都の国の人々を送る宴の夜である。どこもかしこも華やいている。アイゴとアイサ、子どもの星子と月子がいる。

星子と月子 早く行こう、早く行こう。

アイゴ いま、いくだ。そんなに引っぱるでねえ。

星子 鷺彦さんにさよならをいいに行こう。

月子 猪都の国の人たちにさよならをいいに行こうよ。

アイサ そうせくな。送別の宴は月の出から始まるだ。まだまだこれからだ。

星子と月子 ホラ、もう月が出るよ、ホラ、出るよ。だから急ごうよ！

アイゴとアイサ それじゃ、腰を上げるとしようか。どっこいしょ。

星子と月子 ウワー、うれしいな。行こうよ行こうよ。

アイゴ、アイサ、星子、そして月子の四人が退場する。照明が消える。遠くのかがり火が空を薄く染めている。

と、暗闇の中から「ほら、月の出だ！」という高く澄んだ叫び声が響き渡る。すると明るい月光が舞台にみなぎる。猪都の国の人たちを送る送別の席である。

大合唱がわき上がる。

M30 「乾杯の唄」 コーラス

へ盃 ほそうよ
肩組みながら
東の空が 染まるまで

へ盃 重ねよう
膝つきあわせ
国の幸を 祈りながら
語り明かそう
彼は誰時から東雲まで

めでたや めでたや めでたやな
めでたや めでたや めでたやな

へ矢的国と猪都の国
ともに栄えん 千代に栄えん
さあさ さあさ お発ちだ
天が峰さして
さあさ お発ちだ お名残惜しい
今度会うときや
女房や子をつれて
亭主や子をつれて

松彦 さかもり！
全員 さかもり！

たがいに土器を合わせる。乾杯の儀が終わる。乾杯が終わると、松彦と兵士が宴席の中央に進み出る。

へつるぎの先きに 敵をみつけた
血沸き 肉躍り
敵の首はねた
あたりの草は 血潮で真っ赤っか

へ槍のほさきに 敵をみつけた
血沸き 肉躍り
胸板つらぬいた
あたりの土は 血潮で真っ赤っか

へ弓の矢摺（やずり）に敵をみつけた
血沸き 肉躍り
梓弓射った
谷の川水 血潮で真っ赤っか

へ戦いすんで 静かになった
兵士 わっと泣いた
梢のカラス ぐわっと泣いた
見渡す限り 血潮で真っ赤っか

えいえい えいえい えいえいおー
えいえい えいえい えいえいおー

松彦と兵士が下がると、猪彦とアイゴが中央に飛び出してくる。猪彦の歌でアイゴが踊る。しばらくすると女たちが踊りに加わる。

M32 「韓人神」 猪彦とコーラス

へわたしゃ 韓人御崎のよ
韓人神だよ
サテ 嫁の御用なら
嫁の御用なら
いつも ウンンン聞くよ

へわたしや 韓人御崎のよ
韓人神だよ
サテ 婿の御用なら
婿の御用なら
いつも ウンニン聞くよ

へわたしや 韓人御崎のよ
韓人神だよ
サテ 後家の御用なら
後家の御用なら
いつも ウンニン聞くよ

へわたしや 韓人御崎のよ
韓人神だよ
サテ 金が入用なら
金が入用なら
裸で ウンニンおいで

「韓人神」は健康的で、エロティックでもある。何人かの女性が歌につれて踊りだす。大きく激しく揺れる腰、大胆に動く胸。女性たちは自分の肉体を誇示し、宴を謳歌する。男声たちは明るく囃し立てる。

「韓人神」が終わると、巫女が立ち上がり、鈴をシャンシャンと振る。日神子と鷺彦が立ち上がる。

日神子 猪都の国のために！
矢的国の人々 猪都の国のために！
鷺彦 矢的国の為に！
猪都国の人々 矢的国のために！
全員 いやさか、いやさか、いやさか、いやさか、いやさか！

巫女たちが舞を舞う。

M33 「弥栄 B」 合唱

～いやさか いやさか
(三回くりかえす)

矢的は とこしえに
矢的に 幸あれ
おあ おあ おあー

～日神子のためなら
(三回くりかえす)

猪都は とこしえに
猪都に 幸あれ
おあ おあ おあー

大合唱のうちに幕が下りる。

インターロードの3

劇場の思わぬ場所から、人々のイライラした空気が流れる。下手にアイサ、アイゴ、ヤマメゴ、カジカゴがいる。照明があたる。四人は車座になって話しをしている。

M.34 「赤い星」 アイサ、アイゴ、ヤマメゴ、カジカゴ

～赤い星が 西の空へ
流れて行ったよ
北の空から 西へ
赤い糸を さっとひいたとき

～なにか なにか
なにかが 起こるよ

～なにか なにか
なにかが 起こるよ

～それがよいことなのやら
それがわるいことやら

～なにか なにか
なにかが 起こるよ
～北の空から 西の空へ
なにかが 起こるよ
わたしも見た
わたしも見た
真っ赤な星が
流れて行ったよ
なにかが なにかが おこるよ

M.35 「イライラ・イライラ」 女声コーラス

～イライラ イライラ イライラ

なんにも 手が見つからない

あーあ イライラ

あーあ イライラ

～昨日は 月がかけた すっとかけた

今日は カラスが鳴いた ぐあぐあと鳴いた

あすからは きっと煙が空をおおうだろう あすからは

あすからは きっと火が空を焼くだろう あすからは

女性たちは、そのままフリーズになる。シルエットになった姿は大きなカラスに見える。

アイゴ 猪都の国の兵士がおった十五日間は、悪い夢を見ていたようだったな。兵士たちが潮が引くように引き上げてゆくと、矢的国はまへの矢的国じゃなくなってしまった。

アイサ 困った、本当に困った。近頃の日神子さまは気が狂われたような言動ばかり。肩で息をし、胸の前で手を組み、遠くの方を見ては涙を流す。大事な占いに身が入らず、ご神託のことばはいつも決まって……

アイゴ・アイサ 「吾はもよ 女にしあれば」。

アイゴ 昨日、岩彦殿がカリガを訪ねたそうさ。

アイサ ところが、松彦さまもカリガを訪ねたそうさ。

アイゴ お偉方が浮足たっているくらいだ。下々が浮足たってもやむを得まい。

アイサ こりゃ、一体……

アイゴ・アイサ どうなることか！

二人にあたっている照明が消える。

第4幕第1場 「カリガの住まい」

M36の音楽が入る。照明が明るくなる。

女山の中腹にあるカリガの家。大木を大胆に組み合わせたダイナミックな山小屋である。大広間の中央に祭壇がある。部屋はうす暗く、祭壇にともされた灯りが揺らめいているのが幻想的である。中空の明かり窓から月光が部屋の中に届いている。

無数のカラスが梁や祭具の隣に座っている。

M36 「カリガの祈り」 カリガのソロ

へあー あー あー あー

へガンギリ ジキジカ
ガンギリ ジキジカ
ガンギリ ジキジカ
ジカドン
ガンギリ ジカドン
ガンギリ ジカドン
ドマギリ ハラハ

へガンギリ ジキジカ
ガンギリ ジキジカ
ガンギリ ジキジカ
ジカドン
ガンギリ ジカドン
ガンギリ ジカドン
ドマギリ ハラハ

へシャーシャ ラフニャ ハラハ

(ガンギリ ジキジカ)
(ガンギリ ジキジカ)
へシャーシャ キリニャ ナキナ
(ガンギリ ジカドン)
(ガンギリ ジカドン)
へミヨーミョ リリニャ マキマ
(ドマギリ ハラハン)
(ドマギリ ハラハン)

へガンギリ ジキジカドン
ガンギリ ジカジンダ
ガンギリ ジキジカドン
ガンギリ ジカジンダ
ドマギリハラハー

カリガ シッ！（カラスたちは一瞬にして静まる。1羽のカラスがヒョコヒョコとカリガの前に進み出てうずくまる。カラスはカリガを見ている。カリガもカラスを見ている）二年前のことだった。満月の夜、女山の水の沢に、一人の赤いひげの兵士が傷ついて倒れていた。カリガが兵士をここへ連れてきて傷の手当をしてやった。やがて赤いひげの兵士は歩けるようになった。ところがある日、大勢の兵士たちが表の扉を蹴破って乱入し、赤いひげの兵士を連れて行ってしまった。

カリガは一人になった。死にたいほど寂しかった。何回目かの満月の夜、お腹の中にヤヤがいることが分かった。カリガはじっとしておれなくなった。カリガは泣いたり、笑ったり、怒鳴ったりした。だって、もう一人の赤いひげの兵士がお腹の中にいるんだもの、どうしてじっとしていられようか！ それで雨の日も、風の日も、赤いひげの兵士を捜し続けた、待ち続けた。（きつとなって外を見る）そこにいるもの、入って来な！

岩彦と槍彦とその部下の兵士たちが入ってくる。彼らは黒い布の覆面をしている。

岩彦 カリガ、昨夜の返事を聞きにきた。
カリガ (無言)
槍彦 (脅すように) カリガ！

岩彦 待て！（部下を制して）よく、聞いてくれ。この仕事はお前にはできない。わかるかな、カリガ。矢的国が生き延びるか、死ぬかの大事な仕事なのだ。このとおりに頼む。国のためだ、カリガ、お願いする！

カリガ 人を殺すのはいやだ。

岩彦 （冷酷に）だれだって人を殺すのはいやだ。だがくにがそれを必要とした時は一人の人間の思惑は捨てなければならぬ。国のためなら、人殺しも人殺しでなくなる。殺す方も、殺される方も、不運と思ってあきらめてもらわなければならぬ。国という大きな存在を支えるため、国が、一人の人間の命を左右することを何人も止めることはできない。カリガ、国のために選ばれた人間は、いやな仕事、人殺しのような仕事でもしなければならないのだ。よく考えてみてくれ。

カリガ よく考えてみる。もう直き月が満ちる。月が満ちた夜に来ておくれ。

岩彦 カリガ、何を考えているのだ。

カリガ 何にも。（吐き捨てるように）カリガだって、苦しむことがあるさ。

槍彦 父上！

岩彦 シッ！

槍彦 失礼しました。もう、刻限です。

岩彦 ウム。カリガ、月が満ちた晩に改めて何う。

槍彦 （部下に）外を見張れ。（岩彦に）一刻も早くこの場を！

一同は戸口から風のように素早く消えてゆく。カリガが一人残る。祭壇に向き直り、静かに祈る。

アイゴとアイサに照明が入る。

アイサ もう昔の話だ。わしは死んだ亭主に惚れた。嵐の晩、亭主が寝ているところへ忍び込んだ。生まれたまんまの恰好でさ。そして二人は一緒になった。しかし三年目には二人して喧嘩ばかりしていた。そして七年目には喧嘩するのも飽きて、他人みたいに口さえ聞かなくなった。気がついてみたら、後家さんになっていたよ。

アイゴ わしは、嫌いできらいでたまらない男に嫁がされた。無理矢理男の家に連れて行かれ、逃げたら殺すと脅された。だけど、1年経ったら、ジンワリジンワリと好きになってナ、今では二人で酒を飲むのが何よりの楽しみになったのじゃ。ところで日神子さまは驚彦さまと一緒になれるのだろうか？

アイサ いや、日神子さまの願いは叶えられまいて。日神子さまが男に処女を捧げるのは許されていないのだ。女性の体のうちも外も一切が神様に矢的国が捧げたものだからじゃ。だから神の妻になり、神の御子を生むことは許されて

も、日神子さまは永遠に汚れなき乙女でいらっしやらねばならぬ。

アイゴ もし掟を破れば、今度こそ普通の処刑をやらなくてはなるまいと、みんなが噂しているだ。そうしなければ神の怒りをかって矢的国連合は火に焼かれ、海に洗われ、山につぶされ、跡形もなく消え失せてしまうからな。

ホトが石の炎で焼かれ、肉の焼けるにおいやその音に獣のようにのたうち、苦痛のあまり自らの目をえぐり、舌を噛み、大地を踏み、岩をけり、最後は祠の裏の池に入水して命を絶つ。昔の人はこうして罪が清められ、許されて神の妻に生まれ変わると教えているが……

アイサ お痛わしいことだども、止むを得まいて。道は二つしかない。自分を捨てて巫女でいるか、こづかれても、恨まれても、処刑されても、巫女であることを捨てて自分の思いを叶えるか。

アイゴ だどもな、一度男にほれたら最後、もうメクラと同じだ。昔のおめえがそうだったよ。ほれるって狂うことだ。狂って歌い、狂って躍り、狂って泣き、狂って笑い、何をしても正気にもどらんもんじゃから。

アイサ この話はもう止めよう。

アイゴ ああ、それじゃ日神子さまのために祈るとしようか。

アイサ それが、いい。日神子さまいやさか！

アイゴ 日神子さまいやさか！

二人 日神子さまいやさか！

二人にあたっていた照明が消える。再びカリガの住まいに照明が入る。カリガは祈っている。昨夜からずっと祈り続けているのだ。外には松彦が祈りが終わるのをじっと待っている。

M36 「カリガの祈り」 B カリガのソロ

へガンガリア ガンガリガリ
なにやら ドヒャラ
ガンガリア ガンガリガリ
かにやら ドヒャラ
ガンギリ ジカドン

ガンギリ ジカドン
ドマギリ ハラハ

へキーニノヤ キーニノヤ
キノナノハラハ
ドンギノ ナーシャ
ジンギノ ナーシャナーシャ
ハーハラ ハハーリヤ ハララ
ハーハラ ハハーリヤ ハリヤリヤ
へガンガリア ガンガリガリ
地の神 水の神 火の神 地の神
ガンガリア ガンガリガリ
稲の神 花の神 牛の神 馬の神
ガンギリ ジカドン
ガンギリ ジカドン
ドマギリ ハラハ

へシャーシャ ラフニヤ ハラハ
(ガンギリ ジキジカ)
(ガンギリ ジキジカ)
へシャーシャ キリニヤ ナキナ
(ガンギリ ジカドン)
(ガンギリ ジカドン)
へミヨーミョ リリニヤ マキマ
(ドマギリ ハラハン)
(ドマギリ ハラハン)

松彦が小屋の中に入る。カリガは祈り終わった後の落ちる気が感じられる。二人はしばらく黙っている。

松彦 カリガ、いいか、カリガ。聞いてくれ。そちには悪いが、この松彦は日神子さまと鷲彦殿を命にかえても結ばせるつもりだ。(カリガは絶望的なまなざしで松彦を見る) カリガが鷲彦殿を赤いひげの兵士だと信じ、お二人が結ばれる

のを邪魔しているが、松彦はカリガの勝手を許さない。必ず二人の思いを遂げさせてやりたい。どうか手を引いてくれぬか。

カリガ あの人赤いひげの兵士だ。兵士はカリガのものだ！

松彦 もし、おまえがどうしても手を引かぬなら、切る！

カリガ 切る？ カリガを？

松彦 そうだ。カリガを切る。日神子さまのために、一人の女子のために！

カリガ そして矢的国連合のためにだろう！

松彦 いや、日神子さまという女子のためにだ。

カリガ じゃ、カリガのために何をしてくれる？

松彦

カリガ わかった。カリガの赤いひげの兵士を取り上げるなら、カリガも切る、きつと切る！

松彦 この松彦をか？ それとも日神子さまをか？

カリガ 切る、切る、切る！

M36 「切る、切る」 カリガのソロ

へきる きる きる
赤いひげの兵士を
うばうなら

へきってやる きってやる
その血で 月を
紅に 染めてやる

へたとえカラスが止めても
谷川のイヲが紅をきらっても
きる きる
赤いひげの兵士を
うばうなら

へたとえ天の神がとめても
地の女神がとめても
きる きる

赤いひげの兵士を
きる きる
赤いひげの兵士を きる

松彦 カリガ！ 早まるな。お前の気持ちはよくわかった！
兵士 東の空が白くなってきました。夜の明ける前にお館にお帰りにならないと日神子さまが心配なさいます。

松彦 ウム。カリガ、もう一度戻ってくる。松彦の願いを考えてみてくれ。この通り頭を下げる。（と行って地に伏して頭を下げる） 互いに命を粗末にしてはならない。先ほど激したあまり「切る」と口走ったが、忘れてくれ。申し訳ない。（間）失礼する。

松彦と兵士が去る。
カラスが動く。押さえた声で泣く。

M37 「あの人がくるよ」 カリガのソロ

～あの人がくるよ
東の峯をこえて
わたしの顔を 抱き慈しみ給う
赤いひげの兵士
遠い国から
会いにくる

あの人がくるよ
西の沢をくだって
あたしのヤヤを 抱き慈しみ給う
赤いひげの兵士
待宵の
月の夜に

この歌に合わせて、カラスたちが円になって踊る。
さながら盆踊りのようだ。照明が暗くなる。カラスの
鳴き声がひとときわ高く響く。

第4幕第2場 「十回目の待宵の月の夜をむかえた日神子館」

遠くに阿蘇山が黒々とした姿を見せている。日神子は月をみる。風の音に耳を傾ける。夜のしじまをすかして何かを見ようとする。立ち止まる。歩き出す。送別の宴から数えて十回目の待宵の月の夜である。

M37からM39までは4つのスペース・セクションを設定し、そのエリアのみを使う。すなわち「日神子のセクション」、「松彦のセクション」、「岩彦のセクション」、「カリガのセクション」である。M39のカリガのソロが終わるといったん暗転し、次からは全空間を日神子館のエリアとして使用する。

M40 「愛のむごさ」 日神子のソロ

～愛がこんなに
むごいとは
愛がこんなに
とげがあるなんて
ちっともちっとも 知らなかった
女の愛は 雪解け水
女は 目を閉じ 耳を盖ぐ
聞こえるのは 見えるのは
赤いひげの兵士のすがた
赤いひげの兵士のこえ

日神子のエリアの照明が F.O. する。松彦のエリア

の照明が F.I. する。

M41 「炎のような、氷のような」 松彦のソロ

～恋が炎なら
身を焼き尽くしてしまうがいい
恋が氷なら
身を北風にさらし 氷の肌着をまとうがいい
国に何かが生まれてほしい
炎のような日神子
氷のような日神子
わたしは すきだ

松彦のエリアの照明が F.O. する。岩彦のエリアの
照明が F.I. する。

M42 「憂国のうた」 岩彦のソロ

～日神子さま あなたの命は
太陽のもの 月のもの 国のもの
あなたの恋は 神のもの
神を愛し 国を愛す
あなたは神に捧げられた生け贄
男はおぞましもの
男は弱いもの
赤いひげの兵士への恋
摘み取りなさい 吐き捨てなさい

岩彦のエリアの照明が F.O. する。カリガのエリア
の照明が F.I. する。

M43 「あなたは帰ってきた」 カリガのソロ

へ赤いひげの兵士が
帰ってきた
かれは カリガの腕の中で
眠っている
兵士は愛と涙をくれた
兵士はカラスに優しさと笑いをくれた
女山のカラス
踊れ 歌え 笑いなさい
ホッホ ホッホ ホホホホホホ
カッカ カッカ カカカカカカ

カリガのエリアの照明が F.O. する。すべてのエリアの照明が F.I. する。日神子の館である。十回目の待宵月の夜である。十五夜の前夜である。
日神子と松彦が座って、挨拶が終わる。

松彦 姫、お別れに伺いました。姫がおられなくなったら、矢的国連合は再び乱れるかもしれません。岩彦殿がいう武の力をもってしても国を治めきれものではありません。そのことは岩彦殿もよく存じていらっしゃるはずです。

姫、爺も年です。残念ながら体力も精神力も若い人たちにはかないません。これが姫のお姿の見納め、姫のお声の聞き納めかもしれません。

日神子 松彦どの、そなたは日神子が恋に狂ったとお思いでしょう？ いいえ、何も言わないで。そうなの、かつこいいことは申しません。悲しいけどあたしは恋の虜になりました。情欲の虜になりました。そして矢的国を捨てるのです。どうか、愚かな、野放図な卑しい女を許して頂戴！

松彦 一生に一度、好きなことをする。女王だって許されるでしょう。しかし罪は消えません。このことを忘れてはなりませんぞ。日神子さま、あなたは大きな、赤ん坊です……。

日神子 松彦、日神子は鷺彦の次にお前が好きだよ。

二人 (笑う)

このとき館の外で、松彦が「日神子さま、日神子さま」と声高に呼び、駆け込んでくる。武装した副官と女性を連れている。

日神子 あ、岩彦！

岩彦 （厳しい表情で日神子の正面に進んで）日神子さま、最後のご忠告にあがりました。矢的国連合は姫なくして存在し得ません。姫なくして未来を語ることはできません。兵士は、女王のためなら喜んで戦に行きます。喜んで命を国に捧げます。

松彦 岩彦殿、わしも国を愛する気持ちは同じだ。しかし姫と話しをしてみても、姫のご決意を何人といえど変えることはできない ことを知った。

岩彦 （松彦をまったく無視して）それなのに、女王たる日神子さまは愛だ、恋だと緊張感のない、軟弱な、個人的な言動は目に余ります。もし、ご決意を変えていただけない時には・・・・

M44 「それぞれの憂国」 日神子、岩彦、松彦、武官たち、女性たち

～（岩彦） 姫 決意を変えてください

（武官たち） お願いします

（女性たち） お願いします

（岩彦） いまここで 腹かっさばいて

（武官たち） われらも

（岩彦） 憂国の誠をしめさん

（武官たち） わたしも わたしも

 岩彦老と腹たち割って

 殉死する覚悟です

（女性たち） 男たちの憂国の思いを

 見届けにきました

（日神子） 岩彦 わたしを苦しめないで

（松彦） 姫 姫

（日神子） 苦しめないで

（岩彦） 苦しめては

(女性たち) おれませぬ

へ (松彦) 待たれい

(岩彦) 待たれぬ

(日神子) わたしが女王である前に

(武官と女性たち) いえいえ 女王さま

(日神子と松彦) 女でありたい

(女性たち) いえいえ 女王さま

(松彦) 時間を 考える時間を

(武官と女性たち) 日神子さま 国の未来を

(日神子) なぜ なぜ 恋の盲いを

あきらめてはくれないの

(女性たち) 一時の盲いなら

目を開けてくだされ

(岩彦) 国を選ばれるか それとも

恋を 赤いひげの兵士を

お選びなされるか

(日神子) わかりませぬ 答えられませぬ

(岩彦、武官と女性たち) さあ、さあ、さあ、さあ

岩彦 日神子さま、ご返答を！

岩彦はじっと日神子を見つめている。日神子は動かない。彼女の心が動かないのを知ってやにわに剣を抜いて、自分の腹に突き立てる。

日神子 岩彦！ なんということを！

岩彦 お許しくござれ！ だれよりも日神子さまを敬愛し、だれよりも国を愛すればこそ！

M45 「ひめ」 岩彦・ソロ

へわたしの膝で
歌を歌っていた少女が
姫になった
涙を知り 恋を知った
姫を愛するが 姫を憂える
国を愛するが 国を憂える
きって きって ほしかった
その恋を
むかしの 姫に
恋を知らない 姫に

外で激しく言い争う声が聞こえる。制止する声を振り切って鷺彦が飛び込んでくる。数人の兵士が彼に取りつき、袖や裾を離さない。

鷺彦 日神子！
日神子 鷺彦！ 今日はお帰りください！

鷺彦が日神子の声の方へ進もうとする。岩彦の部下たちがさっと行く手を遮る。

兵士たち 鷺彦、やらぬ！
鷺彦 日神子、日神子はどこだ？
日神子 お帰りください！

鷺彦は兵士たちに取り押さえられ、進むことができない。日神子は、自害した岩彦の肩を抱いたまま動けない。鷺彦は岩彦と日神子に気づく。

鷺彦 おお、岩彦殿。まさか・・・。
岩彦 鷺彦殿、よく聞いてくれ。（苦しそうに息継ぎしながらも、一語一語しっかりと話す）日神子さまを、あきらめてくれ。あきらめて、黙って、

帰ってくれ。

鷺彦 姫をあきらめて帰ってくれだと？ 馬鹿な！ それより急いで傷の
手当をなされ！

日神子 鷺彦さま、いまはお引き取りください！

侍女 日神子さま、岩彦さまのお手当を。

岩彦 (必死に自分の言いたいことを伝えようと) 直に、死がやってくる。手当などいらぬ。鷺彦殿、黙って帰ってくだされ。帰ってくださらなければ力づくでも、そなたと姫を拘束し、わしの棺の両側にそなたたちの棺も安置しなければならぬ！

鷺彦 なんとという理不尽な！ どうしてそんな破滅的な結論になるのだ。鷺彦のは理解できない。松彦殿、一体これはどうしたのですか？

松彦 岩彦殿は、そなたと日神子さまのご結婚に最後まで反対なされた。だが、姫は矢的国連合も大切だが、そなたの方がもっと大切だと主張なされた。岩彦殿のいかなる説得も聞き入れなかつた。国を愛する岩彦殿は万策尽き、姫の改心を願うあまり自害なされたのだ。。姫なくして、国が持たないことを知り尽くしている岩彦殿は最後に姫の結婚を邪魔する自分を自らの手で殺めたのだ。姫を愛し、姫を慕う古いもののふにかわりございません。

鷺彦 馬鹿な頑固者！ そんな理屈は・・・

岩彦 くだい！ 頑固者でも筋は通した。姫を愛しているなら、愛しているなら、姫を神への生け贄にせざるを得ない事態だけは避けてほしい！ 愛しているなら、時を待て。わしが息を引き取る前に、黙って帰ってくれ。お願いする！

日神子 鷺彦、岩彦殿の隣の棺と一緒に入りましょう。

鷺彦 日神子！

岩彦 さあ、鷺彦、ご返答は？

鷺彦 さあ。

岩彦 わしの命ももうすぐ消える。この、岩彦の願いをお聞き届けくださらなければ、矢的国連合存続のため、全軍事力を集結して、むごいと、理不尽と、老いの一徹といわれようが、そちの願いを粉碎するつもりじゃ。もし、もし、どうしてもこの老人の願いをお聞き入れくださらぬなら、お命を頂戴する。さあ、岩彦がお相手じゃ！

槍彦 父上！

日神子 みんな、冷静になって姫の言うことを聞いておくれ。岩彦が死んだら、姫も死を選びます。鷺彦が死んだら、やはり姫も死を選びます。

松彦 姫、一刻も早く岩彦殿の傷の手当をしなさい。女たち、なぜ手をこまねいている。

女たち は、はい。

松彦 鷺彦、日神子様のお覚悟がわかったろう。今は岩彦殿を死なせてはならぬ。鷺彦殿はいったん身を引かれい！

岩彦 槍彦、奴を帰すな。禍根を残す。俺は死ぬ。奴も死ぬ。鷺彦、覚悟！（とって相打ちする覚悟で突き進む）

松彦 ならん、ならん。みんな剣を引け！ 槍彦、父上の手当をしなさい！ 日神子さま、鷺彦を遠ざけろ。

槍彦 父上！ ここで死んではなりません。父上！

日神子 岩彦、死んではなりません。いいですか、姫のためにも死んではいけません！

「赤いひげの兵士よ」と叫びながらカリガが上手から飛び込んでくる。たくさんのカラスが上空を覆う。巨大な布製のカラスがステージの天井に羽を広げる。辺りが暗くなる。

カリガ 赤いひげの兵士はカリガのものだ！ 返せ、返せ！

とって鷺彦に抱きつく。たくさんの実寸のカラスが鷺彦に群がり、激しく鳴く。

M45 「立回りの音楽」 ダンス・ナンバー

松彦につかえる近衛兵たちが鷺彦を守ろうと中へ割って入る。松彦は日神子を横炊きにして争いの和から引き離し、王の坐へと導く。巫女や侍女が周りを固める。槍彦は父の腰にすがりつき、父の無謀な戦いを止めようとしている。カリガは日神子に打ってかかろうとする。カラスがカリガの味方をして兵士たちに襲いかかる。兵士が剣を振り回して防戦する。カラスの首が3つ、4つ飛ぶ。首を失った胴体が客席の中を飛び回る。

大混乱になる。荒々しい叫び声、うめき声、剣の音、。血が流れ、亡がらがいくつも床に横たわる。

「日神子」、「鷺彦」、「父上」、「槍彦」、
「姫」、と呼びかう声や「邪魔だ」、「どけ」、「カ

ラスめ」などと怒鳴る声が合間をぬって聞こえる。

カリガが狂ったように荒々しく歌い、叫び、踊り続ける。彼女は戦いのリズムを崩す。彼女は天井の梁に飛び上がり、コウモリのようにぶら下がる。兵士の一人が槍を投げる。槍先は足の甲に突き刺さる。カリガは悲鳴を上げて落下す。女と男のひときわ高い悲鳴、そしてうめき声が聞こえる。兵士たちは化石のように動かなくなる。カリガの剣が鷺彦の胸をつらぬき、鷺彦の剣がカリガののどをつらぬいている。人々が言葉にならない声を立てて、二人の周りに集まる。日神子は鷺彦を抱いて。

日神子　　ああ、鷺彦。日神子もおそばへ参ります。（鷺彦の剣をとって自害しようとする）

松彦　　（剣を取り上げて）待たれい！　姫、早まってはなりません。

カリガ　　（ふらふらと立ち上がり、鷺彦の顔を両手で挟むように持ち上げて）
赤いひげの兵士。カリガの赤いひげの兵士が、とうとう帰ってきた。見ろ、みんな、見ろよ。赤いひげの兵士がカリガのところへ帰ってきた。（彼女の命もつきようとしている）岩彦殿、岩彦殿、赤いひげの兵士が帰ってきただろう。カリガは巫女を止めてよかった。女として待ったかいがあった。（ガクリと体が沈む）
ああ、赤いひげの兵士が消えて行く、去って行く！（立ち上がって幻影を二、三步追う）待っておくれ、待っておくれ！

カリガは数十羽のカラスに乗って舞い上がり、建物の千木に降り立つ。

カリガ　　神様、カリガをお許してください。カリガは兵士に夢中になって、汚れてしまいました。もう、何も望みません。おそばへ参ります。そしてあなた様にお仕えします。

ホトをついて自害する。落下する。カラスたちがカリガを中空で受け止め、中空高く舞い上がる。山の彼方へと飛び、闇に消える。

M47 「傷兵のうめき」 コーラス

鷺彦 (虫の息の中で) ひ・み・こ。

日神子 (彼を抱き起こし) 鷺彦。

鷺彦 わたしは、もう、目が見えなくなってきた。

日神子 いや、死んでは嫌だ。日神子を一人残して死んでは嫌だ。

鷺彦 日神子。(手を取り合う) だれが悪いのでもない。みんなが日神子のため、矢的国のためと考えてやったことなのだ。国という大きな存在が生きて行くためには、青年たちの愛や恋もかくの如く無惨に破壊してしまうのだ。国が栄えるということが非情であるのではなく、国の繁栄という言葉をかざして安直に解決しようとすることに問題があるのだ。もっと難しい解決法、もっと遠回りをする解決法があるかもしれないのに、それを探ろうとしないのだ。

でもこんなことを言っても何の解決にもならない。

日神子 鷺彦、あなたが死んでしまったら、岩彦が死んでしまったら、日神子は何をたよりに生きてらいいのでしょうか。恋を知り、命のはかなさを、国の非情さを知ってしまった女は、瑞々しい復元力を持った巫女ではなくなってしまったわ。

鷺彦 日神子には、大勢の人がついていてはいないか。彼らは日神子を愛し、敬い、慕っている。日神子の力を求め、一緒に国を造ろうとする人々がいるではないか！

日神子 もう遅い、何もかも遅いのよ。日神子は美しい、明るい国を造ろうとした。国民も日神子以上に、国づくりに対して熱い心を持っていた。国の礎はできた。でも、国が恐ろしい生き物のように成長し、日神子の手之余りになった。隣国が飢餓に陥り、助けを求めてきた。わが国はできる限りの応援をしようとしたが、両国のこれまでの歴史を知っている人たちは、いつ相手が牙をむくかわからない。両国の間にはそういう謀略がこれまで何度もあったとから心を許すなど詰め寄る忠臣がいる。岩彦殿は、愛情を込めて、熱く、激しくいさめるように語ってくれた。

国は、たとえ小さな国であっても、一人の女性が神の声を聞き、神の声を聞き分けて、方向を決めて行くには巨大すぎることを知りました。怖いのです、決めることが、神の声を聞くことが！ 日神子は神の前から逃げました。岩彦の前から逃げました。さらに国民の安全と幸せを守る責任からも逃げました。日神子はしょせん女なんです。女王である前に女でありたかったのです。愛する女と姫を両立させたかったのです。でも、国は許してくれなかった。

鷺彦　　だったらそなたは自分が望んだような国を造る義務があるのだ。愛し合う二人が国の名の下に引き裂かれる国ではなく、力を合わせて稲を刈ったり、櫓をこいだりできる国を造るのだ。猪都の国にも愛し合う若い男女が何人もいるはずだ。そういう二人が勇気を持って生きられる国を鷺彦に代わって造ってほしい。国は、歴史を捨て去ることはできない。国は、愛や誠意を飲み込んでしまう恐ろしい存在になることを、そなたは知ったのだから。

日神子　　鷺彦、日神子に、力つきた日神子に、それをやれと……

鷺彦　　(死期が近づいた鷺彦は黙ってうなづく)

人々のすすり泣く声が聞こえる。

鷹彦、アイゴ、アイサの三人が足早に登場する。

鷹彦　　妹よ、妹よ。

松彦と日神子　鷹彦殿。兄上。

鷹彦　　すべての出来事をこの二人から聞いた。(アイゴとアイサを指す) 恐ろしい出来事であるが、ことが起こってしまった以上、今更嘆いていても仕方あるまい。俺は妹が必ずこの結末をつけると信じている。なぜなら姉上は今日あることをご神託によって知っていたはずだ。それを今更責めるつもりはない。どんな逆境にあらうとも結末はつけなければならない。妹にはまだ力が残っているはずだ。

日神子　　お兄様、むごいことを言う。

鷹彦　　いいや、逆境からこそ立ち上がり、不死鳥のようによみがえるのがわが家の血であり、その血を受け継ぐ私たちの宿命なのだ！

鷺彦　　鷹彦殿、聞いてください。日神子が、家も国も捨てて、一人の女として生きたいとわたくしに告白した時、彼女をいさめ、最後には彼女の愛を拒み、矢的国のために女王としての道を歩めと言う勇気がなかった。許してください。

鷹彦　　(鷺彦のそばへ寄る) とんでもない。わしにもそんな勇気はない。

岩彦　　タカヒコどの。わしも、新しいことを、決断する勇気が、なかった。ひたすら、昔からの教えを、守ることに汲々としていた。おゆるしくください。

鷹彦 傷口が広がる。静かにしていられい。誰もそなたを責めてはいない。あなたとて、われわれと同様、この十ヶ月の間、矢的国のこと、妹のことをずっと考えてくださっていた。岩彦殿、しばし、我慢して聞いてください。

岩彦殿と日神子はあまりにご自分の信念に潔癖すぎたのだと思う。決して歩み寄らない二本の縦糸だったのだ。岩彦殿が、鷺彦殿が、そしてカリガがこの地を去ろうとしている。妹よ、いや日神子よ、この悲劇が神のご託宣だったのか？

日神子 それは言えません。

鷹彦 そう。今下された裁きを、このまま終わらせていけない。日神子さま、岩彦殿と鷺彦殿に末期の水を。

日神子、二人に水をあげる。

みなみな手を手を合わせ、冥福を祈る。槍彦が父を抱いて号泣する。日神子は正面を向いて耐えている。

鷹彦 (立ち上がって) 矢的国は まほろば

矢的国は うるわし。

矢的国 弥栄！

人々 矢的国 弥栄！

鷹彦 日神子さま 弥栄！

人々 日神子さま 弥栄！

鷹彦 さあ、日神子よ、剣を持って、立ち上がりなさい。

このとき、慌ただしく武士たちが駆け込んでくる。その後ろに矢的国の武士に囲まれて猪都の国の使者が人垣を分けるようにして登場する。

重臣の1 猪都の国から鷺彦様へ使者が。

鷹彦 なに、使者が？

百舌彦 鷺彦様。(死期が近い鷺彦を見て) おお、これは。犯人はだれだ。だれが手を下したのだ、言え、言え！

鷺彦 早まるな、わたくしとカリガが相打ちをしたのじゃ。岩彦殿は自害なされた。決して早まるではないぞ！ それより使者のおもむきを申せ！

百舌彦 ハハッ！ 昨日、鷺彦様が国を発たれた後、奴国の兵が津波のように押し寄せ、不意をつかれたわが国の兵はひたすら防戦するも、じりじりと後退

するばかり。鷲彦様の父君・鷲王はひるむ兵を励ましはげまし善戦するも、多勢に無勢。ついに北山の高台は奴国の兵の手に渡り、鷹王のご運の果てか、谷川の水も干されて意気消沈、敵が放てし火の槍は館の千木や堅魚木を焼き落とし、火の勢いもさりながら、鷲王様のお行方しれず。「殿、殿」と必死に呼ぶ声も尽き果てました。はやご最後と存ずれば、残りのものは鷲彦さまのもとに集まりてかろうじて城を守りこらえておりますが、もはや、猪都の国がおちるのも時間の問題。

百舌彦の命もこれまで。我が魂は天の鳥となって引き返し、国の行方を見届けるつもり。鷲彦様、みんなに伝える一言を、この耳に、この耳に……（と言いつつ絶命する）

鷲彦　　日神子、わたしの国、猪都の国の悲劇を聞いてくださったか。矢的国連合ができあがりかけては崩れること数回。いつのときも不平を持つ国が反乱を起こして矢的国連合の夢を壊してきた。川のあなたにすむ人、山の彼方にすむ人は手を取り、酒を飲みかわし、平和友好を約しても、いったんことが起こればすべてを反古にするという狭い考を互いに持っていた。

男の統治は歴史と猜疑心と力の所産であったが、これからはこの伝統と歴史を改めなければならない。これからは、これからは……

鷲彦の唇がかすかにうごくものの、声にならない。
アイガとアイサが彼の唇を読んで翻訳する。

アイガとアイサ　いま、日神子の聡明さと、天地自然を読む力が求められている。敵は他国にあるのではない。自国の人々の中に、人々の心の中にある。日神子の暖かさ、情念と行動力を、政に生かしてほしい。そなたが愛の痛さを忘れぬ限り、天地自然を読む力は淀むことがなかろう。いまこそ、政は、明日を、来る月を、来る年を読まなければならない。愛の代償のむごさを忘れぬ限り、神はそなたに未来を語り続けるであろう。

日神子よ、そなたと鷹彦殿、槍彦殿、そして矢的国と猪都の国の人々が心を一つにすれば、すなわち愛と知恵と力を一つに結び合えれば、必ず新しい国造りが果たせるであろう。

岩彦　　日神子さま、一刻も早く、猪都の国に救いの軍を派遣してあげなされ。それが矢的国を救うことになる。残念ながら、お力になれない。皆のもの、さらば！

槍彦　　父上！

日神子　　岩彦！　ありがとう。

松彦 さあ、お決めなされ。自分を見下げてはなりませんぞ、自分を甘やかしてはなりませんぞ。闇の道こそ、お選びなさい！

鷹彦 妹よ、鷹彦はそなたの若い頑迷さを信じたい！

松彦 太陽なる神の力を呼び込んでくだされ！

槍彦 父上の言葉を実現してください！

日神子は岩彦と使者の目を閉じてやる。鷺彦を見る。彼はハラハラと涙を流す。日神子は涙を拭ってやる。彼の剣を手にする。

鷺彦 矢的国は まほろば
日神子
女にしあれば うるわし

M48 「吾はもよ女にしあれば」 C 鷺彦と日神子

～吾はもよ
女にしあれば
汝を除きて
男はなし
男はなし
汝を除きて
夫はなし

鷺彦 さらば……。 (絶命する)

日神子 鷺彦！

人々 鷺彦、いやさか。

日神子は鷺彦を胸に抱く。泣く。人々は祈る。
日神子は亡がらを寝かせる。巫女たちが安置する。

鷹彦 妹よ、自分の力を信じなさい。

松彦 姫様、神なる太陽のお力を借りましょう！

人々 日神子さま、弥栄！
鷹彦 鷺彦様の最後の言葉を忘れてはなりません。
人々 日神子さま、弥栄！
槍彦 父上の死を無駄になさらないでください！
人々 日神子さま、弥栄！

M49 「吾はもよ女にしあれば」 D 日神子

へ吾はもよ
女にしあれば
汝を除きて
男はなし
男はなし
汝を除きて
夫はなし

人々 日神子さま、弥栄！

日神子 鷺彦、安らかに天なる神のもとへ、地なる神のもとへ、海なる神のもとでお休みください。岩彦よ、そなたも神のもとでお休みください。カリガよ、そして国の争いのために命を落とした兵士や女たちよ、安らかに、安らかに、休み給え。

これからは日神子は泣くことはないだろう。泣くこともないだろう。わたくしは死ぬまでの涙と笑いを使い果たしてしまったから。二度と女性としてお腹に子をもうけることはないだろう。日神子は生まれたままの女性です。豊穰なる母体になることを断念します。

わたくしは矢的国によって神に遣わされた日神子に、そして神の言葉を受任する女性に生まれ変わります。鷺彦、誓います。今一時は、日神子は立ち上がります。あなたの教えを歴史という石盤のうえに刻んでみせます。自分の強さに自信がありません。矢的国と猪都の国のうえに平和が訪れるよう努力します。しかし、その後どう生きたらよいかわかりません。今一時は、今一時は、あなたと一緒に築くことができなかつた麗しい心、麗しい自然のなかで子育てや恋や労働や祭ができる国を築くために戦います。どうかこの戦が最後の戦でありますよう、神よ、守り給え！

人々 日神子さま、弥栄！

日神子 鷺彦、岩彦、そして神のもとに参りし人すべてのみたまよ、日神子とその民を護り給え。神よ、誓います。美しい心、美しい自然のなかで子を育み、恋や労働や祭ができる国を築くことを。どうか日神子に今ひととき、力を与え給え！

人々 日神子さま、弥栄！

日神子 日神子の民よ、日神子の兵よ、立ちて、ともに歩まん。さあ、猪都の国の人を救わん！

M50 「いやさか、いやさか」 コーラス

いやさか いやさか
いやさか いやさか
いやさか いやさか
矢的国は永遠に
矢的国に幸あれ
矢的国は まほろば
うるわし 矢的国

オア オア
日神子 いやさか
矢的国 いやさか
猪都の国 いやさか

矢的国は まほろば
うるわし 矢的国

日神子が立ち上がる。正面むいて表情を変えない。能面のような、感情を内に秘めた、血の気のない顔がうつくしい。「いやさか」が終わると、全員が出撃のマーチになる。舞台上の絵は、色彩と構図の饒舌ぶりはさながら「涅槃図」のようであり、中央の釈迦の位置に日神子が立ち、その色彩豊かな台を兵士たちが支える。上手上空に雲に乗った摩耶夫人と阿那律

尊者のように、鷺彦と岩彦とカリガが中空に出現する。犀、象、猫、虎、豹、鶏、孔雀、牛、猪、鹿、蛇などがマーチに加わる。沙羅双樹に似た石の柱が8本、舞台の四隅に立つ。

「矢的国は まほろば うるわし 矢的国」になると全員が複雑に入り交じるが、速いスピードで曼荼羅図のように日神子を中央に据えた安定した構図に各人物がおさまる。幕が下りる。

《上演資料》

ミュージカル・シアター 「葦の会」 公演

小林 志郎/作・演出

永田 清嗣/音楽

日神子

吾はもよ 女にしあれば

昭和49年6月21日～6月24日

紀伊国屋ホール

6月21日	*	6時15分
6月22日	1時30分	6時15分
6月23日	1時30分	*
6月24日	*	6時15分

STAFF

作・演出 小林 志郎
音楽 永田 清嗣
振付 金森 勢

美術監修 朝倉 摂
照明監修 立木 定彦
装置 竹山 実
照明 斉藤 正雄
衣裳デザイン 河井 新二郎
音響効果 高橋 嘉市
小道具考証 湯川 宏
殺陣 水原 仗二
舞台監督 堀井 俊和

音楽補佐 岩田 香枝子
演出助手 高遠 岳
製作助手 石川 裕

製作 城 英顕

演奏

ドラム 猪俣 猛
ベース 荒川 康男
ギター 水谷 公生
パーカッション 中島 御
ピアノ 永田 清嗣

編曲 永田 清嗣 清水 万紀夫

CAST

カサゴ	新井	れいこ
波彦	新井	武宣
アワビゴ	安藤	浩子
鷺彦	板垣	芳徳
ミマキ姫	石川	曜子
アズミ姫	植草	紀子
岩彦	奥村	公延
サヨリゴ	大原	直美
弓彦	大久保	芳正
雁彦	岡本	敏明
星子	加瀬	双美絵
鮫彦	木内	省明
日神子	草間	ルミ
ヤマメゴ	草山	ます美
松彦	黒木	宏
ナカツ姫	桜井	みどり
月子	坂本	道子
槍彦	齊藤	和士
メバルゴ	須田	ヒトミ
狐彦	田中	成庚
鹿彦	高屋敷	孝夫
アイサ	津田	延代
ヌナキ姫	とりい	三枝
カガチ	中山	真理
アユ姫	橋本	ゆみ
稲彦	畑野	こうじ
猪彦	早田	圭吾
ハヤ姫	早野	智恵子
汐彦	広浜	哲哉
アコヤゴ	古田	千穂
鷹彦	藤田	徳次

雉彦

杉彦

カリガ

苗彦

熊彦

カジカゴ

百舌彦

アイゴ

堀川 亮

細井 善次郎

榎岡 婦喜子

松尾 宰

南 周作

宮川 福子

宮内 幸平

水島 早苗